

末法視点で宗教活動の現場を見直す

森 下 龍 浄

■「三離れ」から出発しますか？

これはセクト内では通用しない言葉だろう。セクトといっても「僧侶中心の聖職者独裁組織」だそうで、その三離れ対策で、集会とか勉強会があることを檀信徒が聞いたときどう思うだろう。三離れが寺院を悩ましているらしいと。寺院とは僧侶と檀信徒の関係性の中にあるといえるし僧侶一体なのだが、果たして「同苦」の檀信徒がいるだろうか。対策、動機、問題の核は「檀家減少・収入減の恐怖」だということは見え見え。例えば太宰府の葬儀社で見聞したこと。「BGMに千の風を使うなどといったお寺サン」これは福岡県真宗の空気だと（その後、墓参に影響しなかったとわかり後日撤回されたと聞く）。これではお笑い種ではないか。他地域他宗派にもあるかも知れぬ。

布施収入へのこだわりはまだまだ続く。「同宗派内檀家移動不許可の空気」である。信者の内奥から出発した自発的行動で、個人の道心にかかわることなのに、矮小化して寺院間で盗った盗られたと言いつつ寺院側の姿勢。教師の無理解と檀家減少の恐怖心で抑圧する側に立ってはいないか。檀家は言うだろう。「わしらをモノ扱いか」「ぜひこの寺にという誠意・赤誠・真意を軽く扱うな。それよりも寺院相互の融和が大事なのか」「他宗からの転入はOKなのに、なんで？」などと。往時この問題が長崎県で勃発した時、時の所長は言った「選ばれる僧になろうよ」。至言である。これしかないではないか。

■「生身の釈尊に……」？

ところで、二十八日の立教開宗とは日蓮聖人が生身の釈尊たらんとした日ではないのか。ならば我々教師も生身の釈尊・日蓮たらんと立ち上がるべきではなからうか。それを要請されている今が末法だと受け止める。受け止めるには召命の意識が必要。召命の意識となるとたとえ教師であろうと「熱意をもって勧めれば可能」ではない。誘引でもない。先駆者の背中を見て目覚めた人だけが立ち上がるのである。

法華經の意図を少しでも信解し実行するのは超難儀なので常に説法せねばならない。説法が超難儀なのではない。最初「法華經はご存命」であられた。次は「敷居を低くすることで」それが誰にも見える形となって大衆を魅了した。このように軟化しつつ今日を迎えた。言わば難信難解といわれた法華經も底を打ったのである。書店で「精神世界」のコーナーを覗いてみる。粗っぽくまとめれば「癒し」と「今の自分からの脱皮」なんですね。こんな人たちを相手に法を説こうとする時「あなたも成仏できますよ」というメッセージが有効決定打となりうるのか。

■「手足を以て……」？

法華經は底を打ち、末法は円環して在世となった。ならば路線は一つしかない。法華經を血肉化して、大覺世尊にこの頭にお入りいただいたと自覚して法華經を説かねばならない。「世尊は大恩……手足を以て供給〈信解品第四〉」と明確に示してある。世尊への給仕とは「手足となる」以外になく、血肉化といってもいい。世間の詩にもある。教師とは「法を説く君」なのである。「(手足を以て)法を説く」を下位に置いて世人に受け入れられよう愛される寺になろうと心血を注ぐのは法華經に対して不遜でさえある。三離れに焦つての苦衷であることはわかるが、やはり飛車角喪失を恐れて王將を失う所業にも似て「つたなきものならい……」と釈尊はお嘆きになるだろう。

活力ある寺を横目に見て、焦る気持ちをひとまずシャツフルして基礎体力の見直しやら、今まで慣れ親しんだことを破棄するやら、なかなか骨の折れることだがそれこそ最尊最上の勇氣といえる。地味で緩慢ではあるが、効率無視で法を説くを専らにするよりほかに道はないし、それこそ王道であると信じる。その地平にこそやつと活性化が見えるのではなからうか。

■「蒙古はいつ来襲?」

こんな時、現代宗教研究所は自由な意見交換に門戸を開放してくれている。まずご遺文解釈にも大胆に切り込んでみよう。末法の今日的话题に直結すると思うから。

蒙古はいつと問われた日蓮聖人は「天の御気色怒り（急に見えて）……よも今年は……云々」と答えられている。ここをどう読むか。ある教師は「大聖人のまわりには山人・マタギなんかの支持者が数多いて、幕府に先んじて情報が入った」と。そうだろうか。幕府より早い情報が果たして可能かどうか。情報網が構築されていたのかどうか。「有力信者からの情報では、」とか「深く考えるに……」などもあるのにそうはおっしゃらなかった。「天の御気色」のお言葉がなぜ出てくるのか。なぜかを考えよう。

遺文に即して読むと、カミの気色ばむ様子をありありと感得なさったと「感得・感受」すべきではなからうか。感応道交である。こちらも感応道交でないと正確には読めない一例である。「大覚世尊が頭に……」ともどこかでおっしゃっている、疑いようがない。不思議なのは、宗学者もここを迂回しておられることである。

■「靈感・動物的カン・感応道交」

そこを信じなくて「山人が……」と。これは日蓮聖人への冒瀆ではないのか。それは致し方ないとして、ここで指

摘すべきなのは不勉強ではなく、深い意味での不信である。感応道交受容の過ちである。ここで間違うから（世に言う）靈感などごちゃ混ぜにしてしまふ。靈感など動物的カンと紙一重なのである。世人が間違うのはまだいい。教師は決して間違つてはならない。なのに、間違つてしまふ例がいかに多いか。霊能者が発するカミ（と称する何物か）の言葉・ご託宣を信者が聞くという場面を。危険この上もない。教師とみれば、霊能者の指導をしないどころかその前に拝跪。あげくの果てご託宣を拝聴しそれをそのまま信者へのご託宣とする。ゆゆしきこと。末法中の末法、最たるものではなからうか。

「法華経の真文の致すところの感応」に依らない点では、九識靈断も加えていい。感応を夢見ながらも息切れしたあげくの「靈断」登場ではなかったのか。聞き及ぶ限り気鋭の教師が数多おられるし、非教師の靈断師もおられるとか。的中率◎◎パーセントなどといわれる程の荒削りならば、その運用も合せて内部でよほどの研鑽と開放系の議論を重ねなければならぬだろう。非中の信者をどのように位置づけるか、超難問であると思う。三離れが進む中、そのようなご託宣を出発点とする寺詣りの増加は喜ぶべきことなのかどうか。「今は過渡期」で許されるものかどうか。信仰の裾野拡大と受け止めるべきなのかどうか。

■「感応道交」の復権

日蓮聖人を始めとして、六老僧より今日の一般教師に至るまで、その全員に「感応・感得」は教限りなくあつたはず。しかしそれほど表に出していない（もしくは今日に伝わっていない）のはなぜか。まず第一に、他の「カン」と称するモノの多さに比べて感応の少なさである。象と蟻の比だといえ、ご理解いただけようか。二には、慎重を期しそれとは言明しなかつたということ。三には、はたしてこれは自分の錯覚によるものか、正常か異常か自信がなく、周囲を誤誘導し法華経に傷を付けるのを恐れた。これも慎重さの相似形。四には、「通力」という文言が頭をよぎつての

自己規制。

感応の説明しづらさはブラックホールに似ていよう。そうとしかいいようがないのに、ソコ、ソレとは教えられないのである。別言すれば自転車の乗り方を教える時と似ているといえようか。はあこうなつとるのかなと悟れるように伴走してあげる、に似ている。それに比して靈感は見えず聞きえずを特徴としてあげていいだろうか。玉石混淆の中に感応はある。靈感・感応は汽水域にあるといっている。上流からは截然とわかる、塩分のあるなしで。下流域に行くとも混濁してしまふ。

しかも感応と靈感を誰も「判定できない」のも難儀である。まかり間違つて人格障害者だとして、しばらくの間はそれも判定できない。

難しいが、大覺世尊の智慧と教師自らのカンや思い込みと周辺から知り得たコトとを峻別するの労も決して惜しんではならない。ホコリやら夾雑物を払つて真実の相を共有化し、靈感というものの真実の相を白日のもとに曝し法華經に晒して相応の位置づけをしたい。これは幻想幻惑からの解放ともなる。迷信の徒は目に見えるかたちで増えようとも（これは毒鰻頭）、正信の徒が逃げて行く。この現状は教師の見えないところで静かに進む。一般大衆にも日蓮嫌い法華経嫌い仏教嫌いを増やしていくことになる。一刻も早くブレーキをかけねばならない。感応の復権をと訴えたい。

ここまで、例えて言えばレントゲン照射でわかった病巣について一考察を提示してみた。その精度が如何ほどか。当のレントゲン技士は治療能力はなく外科医でも薬剤師でもない。病巣羅列のみで、明るい未来を提示し得ず、今はこちらまでしか遡及し得ない。先行論文にもあたらず、無謀きわまりないが、各位の叱正を乞う。